

Graded Readersの読書を通して「主体的・対話的で
深い学び」を実現するための理論的考察：
H. G. WiddowsonのCapacity論を軸として

水野, 邦太郎

<https://hdl.handle.net/2324/1866368>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 水野 邦太郎

論 文 名 : Graded Readers の読書を通して「主体的・対話的で深い学び」を実現するための理論的考察 — H. G. Widdowson の Capacity 論を軸として —

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、英語学習者が辞書に頼らずに読書ができる「98%以上が既知語」(Nation, 2009)で書かれた Graded Readers (GR) の読書を通して、英語独自の思考・表現様式を主体的に味わいながら英文を解釈し、既知語の使い方の理解を深める学びを実現するための理論的枠組みに関する研究である。

GR は学習者のために段階別に語彙と文法が制限された読み物である。学習者は、様々なトピックについて書かれた GR から、98%以上が既知語で書かれた本を選ぶ。そして、具体的な文脈(物語)の中で自分が持つ潜在的な言語知識を使いながら、英文の意味を解釈し、心の中にディスコース(物語の世界)を創り出す。同時に、既知語の使い方に対する気づきや発見を付随的に得ることを通して、その使い方に対する理解を深めていく。これを効果的に行うには、教師が GR の英語の語彙(単語の使い方)について明示的に学習者に教授し「インプット処理指導(Input Processing Instruction)」(VanPatten, 2009)を行う必要がある。この教育的介入を取り入れた GR の読書教育の理論的枠組みを、本論文は Widdowson (1983a)の「Capacity 論」を軸に、認知言語学における「使用基盤モデル」(Langacker, 2000)と「触媒的インタフェース・モデル」(山岡, 1997)を融合させた「Capacity モデル」として構築し、理論的・具体的に提示した。

英語の語彙について明示的にインプット処理指導を行う際にその教授内容の選択を支援する方法として、GR の一つである Oxford Bookworms (OBW)シリーズの英語コーパスを構築した(各段階 10 冊, 計 60 冊)。そして、OBW コーパスを認知言語学における使用基盤モデルの観点(慣習的な言語単位, トークン頻度, タイプ頻度, 軸語スキーマ)から分析することの有効性を、look(動詞)を例に具体的に示した。look は日本の中高生にとって「見る」「~のように見える」という意味で馴染みのある既知語であるが、look を使えるようになるには、日本語との一対一対応のレベルでの既知の理解から脱却を図る必要がある。そこで、本論文では、使用基盤モデルの観点から分析して得られた OBW の look の使い方についての性質特徴を、学習者が潜在的な言語知識として持ち実際に読書で使うことを通して、OBW の読書を通じた主体的・対話的で深い学びが期待できることを論じた。

また、OBW シリーズの look の使い方が、Stage が上がるにつれてどのように変化するかを調査した。Stage 間の look の使い方の違いを見る切り口として、look を軸語とする「look + -ly」「look + 形容詞」の軸語スキーマにおける -ly 副詞と形容詞を、CEFR-J(投野, 2013) の難易度ランキングと

(比乙様式 3)

対応させた。その結果、CEFR-J のランキングで高い-ly 副詞と形容詞の事例が、Stage 上がるにつれて多く使用されていくことがわかった。各 Stage の-ly 副詞と形容詞の事例リストは、「look + -ly」「look + 形容詞」の軸語スキーマを教師が学習者に形式・処理教授する際のデータ・ベースとして利用することができる。

さらに、OBW の look に関する言語知識を使って、Ungraded な英語で書かれた *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* (Rowling, 1999)を読む場合、OBW の look に関する言語知識を用いて、同じように *Harry Potter* の look の使い方の理解を深められることを示した。Ungraded と Graded の相違点は、「look + -ly」「look + 形容詞」において-ly 副詞と形容詞にいくつかの違いがあった。共通点として、慣習的な言語単位のトークン頻度のほとんどが1であった。つまり、OBW60冊を読んでも、通常の小説を一冊読んでも、ほとんどの慣習的な言語単位との出会いは一回限りである。したがって、効率と効果を重視する学校英語教育において、慣習的な言語単位の習得は読書による付随的語彙学習と意図的語彙学習の両方が必要となる。

今後の研究の展望として、本研究が提示した look の学びを促進する触媒としての潜在的な言語知識を、教師が効果的にインプット処理指導する方法を考える必要がある。そして、学習者が look に関してそのような言語知識を潜在的に持つことにより、物語の解釈がいかに面白く豊かになったか、触媒の効果を検証する必要がある。さらに、中学高校の6年間の学習語彙数と、OBWの6段階を対応させ、英語教育カリキュラムにOBWの読書教育を位置づけることを提案する必要がある。そのためには、本研究が look に関して示したような潜在的な言語知識の探求を、OBWで高頻度で使用される他の単語に関して行わなければならない。